



TITLE:

# 腎及び副睾丸結核患者の年令的推移に就いて

AUTHOR(S):

荒川, 保徳; 野沢, 忍

---

CITATION:

荒川, 保徳 ...[et al]. 腎及び副睾丸結核患者の年令的推移に就いて. 泌尿器科紀要 1960, 6(3): 231-236

ISSUE DATE:

1960-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111916>

RIGHT:

〔泌尿紀要 6 卷 3 号〕  
昭和 35 年 3 月腎及び副睪丸結核患者の  
年令的推移に就いて

秋田県花岡鉱山病院皮泌尿科医長

荒川保徳

青森県五所川原市立西北中央病院皮泌尿科医長

野沢忍

A Shift in Age of the Patients with Renal  
and Epididymal Tuberculosis

Yasunori ARAKAWA, M. D.

*From the Department of Dermatology and Urology,  
Hanaoka Mine Hospital Akita, Japan*

Shinobu NOSAWA, M. D.

*From the Department of Dermatology and Urology, Goshogawara  
Municipal Seihoku Central Hospital, Aomori, Japan*

Among the patients with renal and epididymal tuberculosis reported to 12 health centers in Aomori and Akita prefectures from 1945 through 1958, those patients who could be subjected to investigate were 1061 cases with renal tuberculosis and 236 cases with epididymal tuberculosis. The following results were obtained by investigating sex and age during this period which was divided into three periods, 1945—1950 (first period), 1951—1955 (second period), 1956—1958 (third period).

- 1) Number of the patients with renal tuberculosis was 1.21 times greater in male than female.
- 2) Number of the patients with renal tuberculosis in second and third decade, especially the latter was decreased, while more than fourth decade was increased.
- 3) The highest incidence of renal tuberculosis was found in third decade during the first and second period and in fourth decade during the third period.
- 4) Average age of the patients with renal tuberculosis was increased in each period and the rate of the increase was more significant in female.
- 5) In third and fourth decades higher incidence of renal tuberculosis was found in male, while female in fifth decade.
- 6) The patients with epididymal tuberculosis were decreased in third and fourth decades during the third period comparing with the first and second periods and in the other decades it was rather increased resulting in less difference in age.
- 7) There was no consistent change in the shift of incidence by average age in the patients with epididymal tuberculosis.

## 緒 言

肺結核の発病年令は時代が進むにつれて高年

層に移行すると云われているが、腎及び副睪丸結核患者の年令的推移に関する文献は我が国で

は未だ余り見当らない。著者等は此の点に着目し次の如き観察を行った。

調査方法

昭和20年以降33年迄に青森、秋田両県に亘る12保健所（8市10郡、管内総人口約161万、第1図及び第1表参照）に届け出のあつた腎及び副睾丸結核患者の性、年令について調査した。調査は主に各保健所の結核患者届出台帳により、その無い場合は結核患者届

第1図 調査範囲



出票又は結核患者登録台帳によつた。尚期間はストマイ等の化学療法が無い時代又は殆んど用いられなかつ

第1表 調査保健所名

県別	保健所	区 域	人口 (単位 千人)
青 森 県	青 森	青森市, 東津軽郡	263
	弘 前	弘前市, 中津軽郡	177
	黒 石	黒石市, 南津軽郡	170
	五所川原	五所川原市, 北津軽郡	135
	鯨ヶ沢	西津軽郡	103
秋 田 県	大 館	大館市, 北秋田郡花矢町, 比内町, 田代町	108
	鷹ノ巣	前記以外の北秋田郡	75
	花 輪	鹿角郡	80
	能 代	能代市, 山本郡	148
	五城目	琴浜村及び天王町を除く南秋田郡	56
	男 鹿	男鹿市, 南秋田郡琴浜村	62
	秋 田	秋田市, 南秋田郡天王町, 河辺郡	233
	計	8市10郡	1610

第2表 届出腎結核患者数

保健所	年度(昭)															計
	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33		
青 森	37	—	—	—	9	40	32	17	9	15	—	28	38	31	256	
弘 前												21	12	6	9	48
黒 石							12	13	10	6	20	28	12	13	114	
五所川原											8	4	5	25	42	
鯨ヶ沢					6	8	8	10	6	3	5	6	3	12	67	
大 館			6	13	5	5	8	10	6	5	8	5	9	10	90	
鷹ノ巣							3	2	7	6	5	7	7	7	44	
花 輪	1	1	0	8	8	7	6	6	2	8	4	9	4	6	70	
能 代								2	4	3	9	10	2	9	39	
五城目							5	3	2	1	3	5	0	5	24	
男 鹿							3	4	7	2	7	1	10	5	39	
秋 田				6	18	—	19	35	17	30	26	28	29	20	228	
計	38	1	6	27	46	60	96	102	70	79	116	143	125	152	※ 1061	

※年令不明9名を含む

た昭和20~25年を第1期, 26~30年を第2期, 化学療法が普遍的に大量用いられる様になった31~33年を第3期として観察した。

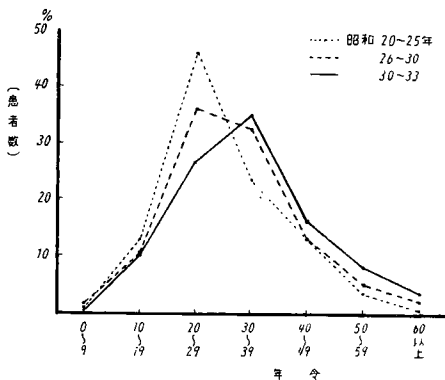
調査成績

I. 腎結核. 前記期間内の観察出来た腎結核患者数は第2表の如く1061名(年令不明の9名を含む)である。

1. 性比. 1061中男580名(54.7%), 女481名(45.3%), 性比は1.21:1で有意の差を以つて男に多い。期別に之を見ると男/女は1期1.14(95/83), 2期1.42(272/191), 3期1.03(213/207)となり, 必ずしも性比が減少しつつあるとは云えない。

2. 年令. 年令不明の9名を除く1052名について期別の平均年令をみると, 1期29.3才, 2期31.3才, 3期34.3才となり, 次第に壮年層に移行している。更に年台別にみると第2図の如く1期では178名中20才台が

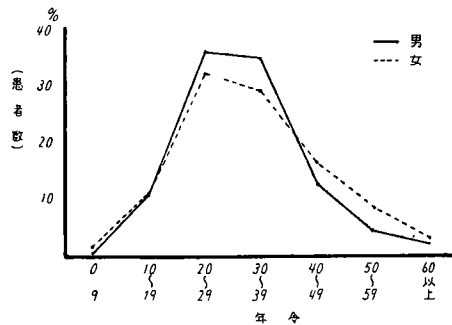
第2図 腎結核患者年令



46.1%を占めて最も多く, 30才台23.6%, 10才台及び40才台が共に12.9%で之に次ぎ, 20才台をピークとしてかなり急峻なカーブを画いている。2期には1~3位の順位は夫々20才台, 30才台及び40才台で1期と変りが無いが, 456名中20才台が36.0%に減少, 反対に30才台が32.5%に増加, 40才台が前期と同じ12.9%を示し, 10才台が10.3%で之に次ぎ, カーブはかなりゆるやかになっている。更に3期になるとピークは完全に30才台に移行して418名中35.2%を占め, 次いで20才台26.8%, 40才台16.0%, 10才台10.0%の順である。又50才台は1, 2, 3期夫々3.4%, 5.0%及び8.1%と次第に増加, 60才以上も1, 2, 3期夫々0.6%, 1.8%及び3.6%と漸増の傾向にある。即ち10~20才台, 殊に20才台が次第に減少し, 30才以上は各年台層を通じて次第に増加している。

3. 性別年令. 男女別に年令を見ると第3図の如く

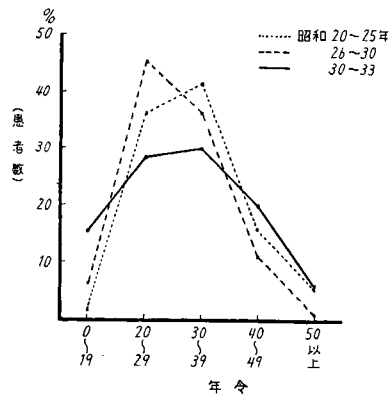
第3図 腎結核患者性別年令



患者数は何れも20才台>30才台>40才台>10才台>50才台の順で一致するが, 平均年令は男31.5才, 女33.0才で男が低い。又性別平均年令を期別にみると1, 2, 3期夫々男が29.8才, 30.7才及び33.1才; 女28.7才, 32.1才及び35.5才で共に上昇している。更にその1, 2期の差及び2, 3期の差を見ると男では夫々0.9才及び2.4才; 女は共に3.4才であり, 平均年令の上昇率は女の方が高い。年台別に見ると20才台, 30才台は男が夫々574名中35.9%及び34.7%; 女は478名中夫々31.8%及び28.9%で共に男に多く, 9才以下, 40才台, 50才台及び60才以上では男が夫々0.3%, 12.4%, 4.2%及び1.9%; 女は夫々1.5%, 16.3%, 8.2%及び2.7%で何れも女が多い。しかし10才台は男女夫々10.6%及び10.7%で差はない。

II. 副睪丸結核. 前記期間内の観察し得た副睪丸結核患者数は第3表の如く236名である。平均年令は1期33.2才, 2期30.8才, 3期32.2才で一定の傾向は認められない。年台別にみると第4図の如く1期は58名中20~30才台が計77.6%を占め, 40才以上計20.7%, 19才以下1.7%である。2期は108名中20~30才台が計81.5%, 40才以上計12.0%, 19才以下計6.5%であ

第4図 副睪丸結核患者年令



第 3 表 届出副腎丸結核患者数

年度(昭)		20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	計
保 健 所																
青 森		18	—	—	—	4	8	7	4	3	1	—	2	7	2	56
弘 前												3	1	3	0	7
黒 石								7	2	0	3	3	5	0	0	20
五 所 川 原												3	2	4	7	16
鱒 ケ 沢						1	1	1	3	4	2	2	2	3	1	20
大 館				2	2	1	7	2	3	1	1	1	4	2	4	30
鷹 ノ 巣								1	0	1	0	0	0	1	1	4
花 輪		0	0	0	2	0	1	1	0	1	1	4	1	3	0	14
能 代									1	0	0	1	0	0	1	3
五 城 目								2	1	1	0	0	1	0	0	5
男 鹿								1	0	0	2	1	0	1	2	7
秋 田					4	7	—	4	10	15	2	2	4	6	0	54
計		18	0	2	8	13	17	26	24	26	12	20	22	30	18	236

る。即ち 1, 2 期共20~30才台をピークとしてかなり急峻なカーブを画いている。之に対して3期は70名中20~30才台が計58.6%に減じ、40才以上計25.7%, 19才以下計15.7%である。即ち3期は1, 2期に比べて20~30才台が減少してそれ以外の年台層は何れも増加し、カーブがかなりゆるやかになっている。

### 考 案

1. 腎結核患者の性比。之に関しては既に多くの文献があり、最近でも男/女が多田<sup>11)</sup>の1.2, 阿世知<sup>9)</sup>の1.6, 赤坂等<sup>3)</sup>の1.1, 大森<sup>4)</sup>の1.2等の報告があり何れも男に多い。このことは肺結核及び癩にも認められ、尾村<sup>5)</sup>は両者共男女比が約3:2で男に多く、年令分布も両疾患類似しているの、感染機会、体質、抵抗力等の諸要因に男女差があり、且ある程度両疾患の要因に共通性が存するのではないかと云う。著者等の腎結核の統計でも男女比が1.21でやはり男に多く、多田及び大森の数値に一致する。又北野<sup>6)</sup>によれば癩患者の男女比は次第に減少し、昭和10年2.39, 20年1.75, 30年1.64と云うが、著者等の腎結核の場合では1期(昭和20~25年)1.14, 2期(26~30年)1.42, 3期(31~33

年)1.03で必ずしも性比が減少しつつあるとは云われない。

2. 腎結核患者の年令。肺結核の発病年令は文化が進むに従って次第に高年層に移行すると云われている。我が国でも戦後此の傾向が著明で、全国肺結核患者の統計では昭和30年迄は20才台が最も多いが31年以後は30才台が最も多い<sup>7)8)</sup>。又昭和28年と33年に行なわれた結核実態調査の成績でも29才以下の患者数が前者の123万名から後者の75万名に減少し、反対に30才以上は各年台層を通じて増加している<sup>9)10)</sup>。又岡等<sup>11)</sup>が宮城県の農村で調査した成績でも29才未満が昭和14年の56.0%から昭和27年の37.6%に減じ、反対に30才以上が44.0%から62.4%に増加している。此の傾向は癩にもみられ、大西<sup>12)</sup>によれば癩患者の平均年令は昭和13年の21.3才に対し23年は32.1才となつている。又北野<sup>6)13)</sup>の統計では昭和20年以前の平均年令が20才台であつたものが21年以後は30才台となり、30年には42.6才となつている。又志水等<sup>14)</sup>によれば40才以下の患者数と41才以上の患者数との比が大正8年には2.4を示していたが昭和5年

には、1.7となり、24年には0.7となつている。癩における此の様な傾向は緒方<sup>16)</sup>も認めている。ひるがえつて腎結核についてみると、此の種の観察は未だ我が国では余り見当らないが、音山等<sup>16)</sup>は昭和32年8月以降33年9月迄に40才以上の腎結核患者が34名中32.4%あつたが、それ以前の10年間には354名中21.8%であつたと云う。又大森は昭和27~32年の統計では以前の諸統計に比べて20才台が少なく、30才台が多いと述べ、大越<sup>17)</sup>も東大における統計で年令の右旋傾向を認めている。著者等の腎結核患者の調査では平均年令が1期29.3才、2期31.3才、3期34.3才と次第に上昇している。又腎結核の最多発年令は1,2期共20才台であつたが3期には30才台に移行している。此の原因として結核が次第に毒力の少ない疾患になりつつあるという説もあり、大森は化学療法の結果発病年令及び来院の時期が遅れる為であると述べたが、その外に国民全体の体位の向上並びにそれに伴う平均余命の延長、BCG及び集団検診等による結核予防対策の充実、一般の医学的レベルが高まつて今迄診断を受けなかつた老人迄病院を訪れる様になつたこと等も原因として考えられる。又著者等の例を年令別にみると20才台は1,2,3期夫々46.1%, 36.0%及び26.8%と著減、10才台も1,2,3期夫々12.9%, 10.3%及び10.0%と漸減している。之に反し30才台は1,2,3期夫々23.6%, 32.5%と増加、40才以上も各年令層共増加し、合計は1,2,3期夫々16.9%, 19.7%及び27.7%である。しかし1951年 Kretschmer<sup>18)</sup>が発表したアメリカにおける腎結核の統計では20才台15.1%, 30才台36.6%, 40才台27.9%となつており、アメリカよりは年令推移が未だかなり遅れている様である。

3. 腎結核患者の性別年令。大森は腎結核の最多発年令は男25~29才、女30~34才とし、反対に西田等<sup>19)</sup>は112名をみの統計ではあるが、女子は男子より若年層に罹患する者が多く、高年層では男子罹患が多いと云う。又多田<sup>20)</sup>は60才以上及び10才以下が男1703名中夫々18名及び19名、女736名中夫々9名及び12名で、共に比率は女に多いと云う。滝川<sup>21)</sup>によれば癩におい

ても9才以下は女に多い。肺結核では厚生省の調査<sup>22)</sup>によると昭和30, 31年共年令別頻度は男30才台>20才台>40才台、女20才台>30才台>40才台の順となり、前田<sup>23)</sup>は男子壮年層において結核罹患率が増加するのは社会的及び経済的負担が此の層の男子に重く加担される為であると述べている。又大越は男は性器結核の合併から検査を受けて自覚症が出ない内に腎結核の診断がつけられる機会が多いことも原因しているのではないかと云う。著者等の腎結核患者の調査では平均年令が1, 2, 3期夫々男29.8才、30.7才及び33.1才。女28.7才、32.1才及び35.5才で男女共に上昇している。且その1, 2期の差及び2, 3期の差をみると男は夫々0.9才及び2.4才、女は共に3.4才で、平均年令の上昇速度は女の方がやや速い。日本人の平均余命の上昇率が女に高いことと考へ合せると興味深いものがある。即ち昭和10年から23年迄に男は46.9才から55.6才迄8.7才、女は49.6才から59.4才迄9.8才平均余命が延長し、更に昭和23年から33年迄の10年間の延長年数は男9.4才に対して女は10.2才に及んでいる。又著者等の統計を年令別にみると20才台及び30才台が夫々男35.9%及び34.7%, 女31.8%及び28.9%で共に男に多く、9才以下、40才台、50才台及び60才以上は夫々男0.3%, 12.4%, 4.2%及び1.9%; 女1.5%, 16.3%, 8.2%及び2.7%で共に女に多い。10才台は男女夫々10.6%及び10.7%で差は認められない。

4. 副睪丸結核患者の年令。音山等は昭和32年8月~33年9月迄の副睪丸結核患者の年令をそれ以前10年間の年令と比較した結果、40才以上の患者数が16.8% (184名中) から40% (25名中) に増加したと云う。その原因としては腎結核の項で述べたと同様のことが考えられる。又田村等<sup>24)</sup>は大正9年~昭和9年の数値と昭和20~23年3月の数値を比べて20才台が49.6% (500名中) から44.8% (134名中) に減じ、反対に30才台が25.2%から33.5%に増加したことを指摘した。且61才以上の患者が1.0%から2.2%に増加したことは戦後における老人の栄養低下によると思われると述べた。著者等の調

査では平均年令は1, 2, 3期夫々33.2才, 30.8才及び32.2才で一定の傾向は認められない。但し1, 2期20才台及び30才台の合計は夫々77.6%及び81.5%であつたが3期は58.6%に減じ、反対に19才以下は1, 2期が夫々1.7%及び6.5%であつたものが3期には15.7%に増加, 40才以上も1, 2期の20.7%及び12.0%から3期には25.7%に増加している。即ち年令による患者数の差が減少している様に思われる。

### 結 論

昭和20年以降33年迄に青森, 秋田両県に亘る12保健所に届け出られた腎及び副睪丸結核患者中調査し得た者は前者1061名, 後者236名である。之を第1期(昭和20~25年), 第2期(26~30年)及び第3期(31~33年)に分けて性及び年令を観察し次の結果を得た。

- 1) 腎結核患者は1.21:1の割合で男に多い
- 2) 腎結核患者の年令は10才台及び20才台, 殊に後者が減少し, 30才以上は各年台層共漸増しつつある。
- 3) 腎結核患者の最多発年令層は1, 2期では共に20才台, 3期では30才台である。
- 4) 腎結核患者の平均年令は男女共次第に上昇し, 且その上昇率は女に高い
- 5) 腎結核患者の性別年令分布は20才台及び30才台は男に多く, 40才台以上は女に多い
- 6) 副睪丸結核患者は3期は1, 2期に比べて20才台及び30才台が減少してその他の年台層が増加し, 年令上の発生頻度の差が少なくなつている。

7) 副睪丸結核患者の平均年令の推移には一定の傾向が認められない。

### 参 考 文 献

- 1) 多田: 泌尿紀要, **3**: 17, 昭32.
- 2) 阿世知: 日泌尿会誌, **49**: 1109, 昭33.
- 3) 赤坂他: 泌尿紀要, **5**: 80, 昭34.
- 4) 大森: 泌尿紀要, **5**: 293, 昭34.
- 5) 尾村: 第15回日本医学会総会, 昭34.
- 6) 北野: レブラ, **27**: 430, 昭33.
- 7) 厚生統計協会: 厚生指標, **3**: 2号, 53, 昭31.
- 8) 厚生統計協会: 厚生指標, **5**: 10号, 68, 昭33.
- 9) 厚生統計協会: 厚生指標, **5**: 11号, 32, 昭33.
- 10) 隈部: 日結, **18**: 1, 昭34.
- 11) 岡 日結, **13**: 33, 昭29.
- 12) 大西: レブラ, **19**: 27, 昭25.
- 13) 北野: レブラ, **26**: 325, 昭32.
- 14) 志水他: レブラ, **19**: 16, 昭25.
- 15) 緒方: 日医新報, 1838号, 6, 昭34.
- 16) 音山他: 日泌尿会誌, **50**: 249, 昭34.
- 17) 大越: 日本泌尿器科全書, **4**: 5, 昭34.
- 18) Kretschmer: Urol. and Cut. Rev., **55** 715, 1951.
- 19) 西沢他: 泌尿紀要, **2**: 87, 昭31.
- 20) 多田: 泌尿紀要, **1**: 1, 昭30.
- 21) 滝川: レブラ, **26**: 92, 昭32.
- 22) 前田: 日結, **13**: 881, 昭29.
- 23) 厚生統計協会: 厚生指標, **6**: 10号, 34, 昭34.
- 24) 田村他: 臨牀皮泌, **3**: 189, 昭24.